

第32回夏期福音特別集会 第4回集会（伊東）

全身全愛

——マルコ伝第11～14章——

小池辰雄

1985年7月28日

葉ばかりの信仰 すでに得たりと信ぜよ 神の国の根源現実 隅の首石 汝の神を愛すべし
 キリストの棄身の愛 レプタニツ 神さまとの結び返し ナルドの香油 お返しの愛の生活
 笹の露 その愛と憐憫とにより

【マルコ11】

²『むかいの村にゆけ、其處に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん。……』

¹²あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢え給う。¹³遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。……』

¹⁵彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐一出し、両替する者の台、鵠を売るものの腰掛を倒し、¹⁶また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給わず。¹⁷かつ教えて言い給う『「わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜の巣」となせり』¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。¹⁹夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

²⁰彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。²¹ペテロ思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛い給いし無花果の樹は枯れたり』²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。²³誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。²⁴この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。²⁵また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』

【マルコ12】

¹イエス讐たとえをもつて彼らに語り出で給う『ある人、葡萄園のみを造り、籬を廻まがきめぐらしらし、酒槽さかぶねの穴を掘り、櫓たびたちをたて、農夫たちどもに貸して、遠くに旅立せり。



²時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、
³彼ら之を執えて打ちたたき、空手にて帰らしめたり。⁴又ほかの僕を遣ししに、
 その首に傷つけ、かつ辱めたり。⁵また他の者を遣ししに、之を殺したり。
 その愛しむ子なり「わが子は敬うならん」と言いて、最後に之を遣ししに、
⁷かの農夫ども互いに言う「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその
 嗣業は、我らのものとなるべし」⁸すなわち執えて之を殺し、葡萄園の外に
 投げ棄てたり。⁹然らば葡萄園の主、なにを為さんか、¹⁰來りて農夫どもを亡
 ぼし、葡萄園を他の者どもに与うべし。¹¹汝ら聖書に「造家者らの棄てたる
 石は、これぞ隅の首石となれる。これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら読まぬか』……

²⁸学者の一人、かれらの論じおるを聞き、イエスの善く答え給えるを知り、
 進み出でて問う『すべての誠命のうち、何か第一なる』²⁹イエス答えたもう『第一
 は是なり』³⁰「イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主なり。³¹なんじ
 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を
 愛すべし』³²第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより
 大なる誠命はなし』³³学者いう『善きかな師よ「神は唯一にして他に神なし』
 と言ひ給えるは真なり。³⁴「心を尽くし、智慧を尽くし、力を尽くして神を
 愛し、また己の隣を愛する』は、もろもろの燔祭および犠牲に勝るなり』³⁵
 イエスその聴く答へしを見て言ひ給う、「なんじ神の国に遠からず』此の後
 たれも敢えてイエスに問う者なかりき。……

⁴¹イエス賽錢函に對いて坐し、群衆の錢を賽錢函に投げ入るるを見給う。
 富める多くの者は、多く投げ入れしが、⁴²一人の貧しき寡婦やもめが、レプ
 タ二つを投げ入れたり、即ち五厘りんほどなり。⁴³イエス弟子たちを呼び寄せて
 言い給う『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡
 ての人よりも多く投げ入れたり。⁴⁴凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、
 この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有もちもの、即ち己が生命の料しろをことごとく
 投げ入れたればなり』

【マルコ13】

¹⁹その日は患難なやみの日なればなり。神の万物を造り給いし開闢より今に至るま
 で、斯る患難はなく、また後にもなからん。²⁰主その日を少なくし給わづば、
 救わるる者、一人だになからん。

【マルコ14】

³イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給



うとき、或女、価高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち来り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。⁴ある人々、憤りて互に言う『なに故かく濫りに油を費すか、⁵この油を三百デナリ余に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』而していたく女を咎む。⁶イエス言い給う『その為すに任せよ、何ぞこの女を恼ますか、我に善き事をなせり。⁷貧しき者は、常に汝らと偕におらず。⁸この女は、なし得る限りをなして、我が体に香油をそそぎ、預じめ葬りの備えをなせり。⁹誠に汝らに告ぐ、全世界、何処にても、福音の宣伝えらるる処には、この女の為しし事も記念として語らるべし』

●葉ばかりの信仰

今日の標題は「全身全愛」としましたが、私はこういう題は全然前もつて考えてない。これ（集会次第）を書いているうちに、即、閃いてくる。この福音の世界は、み霊の世界はありがたい。

今日は11章から、エルサレムの入城です。これは、旧約の預言のとおり、キリストは実践されたわけです。驢馬に乗つてやつて来られた。しかも、²『むかいの村にゆけ、其處に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、

というようなことは、空間を乗り越えて予見する。いわゆる千里眼といいますけれども、キリストの靈眼というのはそういうものです。

¹²あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢え給う。¹³遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。

あくる日ベタニヤから出ていらつしやつたらイエス飢え給うと。肉体を持つたキリストが、お腹がすいた。いわゆる三度三度のお食事なんかはしていらつしやらないんでしようから。無花果を見たところが、実が稔っていない。葉っぱばかりだと。私はここを読んだ時にすぐ思った。

「葉っぱばかりの信仰」

は観念信仰と。観念的な信仰は実が稔らない。福音は具体的に受けて、具体的に展開していく。

¹⁵彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを遂い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒し、¹⁶また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。¹⁷かつ教えて言い給う『「わが家は、もうもろの國人の祈の家と見えらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝



らは之を「強盜の巣」となせり』

今度は、エルサレムに行きますと、宮の中で売り買いをやつてゐる。祈りの家ですから、それはとんでもない。祈りの家で両替する、また商売をしている。それで、キリストは火の如く怒られて、腰掛けをひっくり返した。このキリストの烈しい行為は、宮清めといわれる事態です。神の事態を、宗教の世界を、地上のそういうた事でもつて、すっかり濁しているから、キリストは行為をもつてこれをひっくり返した、行為をもつて清められた。この凄い絵はもちろん名画の中にもあります。

「祈りの家となえられるのに何とか。汝らはこれを強盜の巣となす」

と。

¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、ことごとに、キリストを葬ろうとしている。

●すでに得たりと信ぜよ

¹⁹夕^{ゆうべ}になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

²⁰彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。²¹ペテロ思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛い給いし無花果の樹は枯れたり』²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。²³誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わズば、その如くなるべし。

凄いです、キリストのこの言は。キリストの祈りというのは、もうすでに得られたものとして祈つてゐる。現在完了、未来完了、みな完了の形です。その次の言葉は非常に大事な言葉です。

²⁴この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。

「この祈りは聽かれるだろうか、どうだろうか？」

なんて、そんな祈りはダメだ。祈りも、全身の祈りです。分裂のない、全的な祈り。「全身」というのは「全存在的な」ということ。それは身体と心と靈が渾然としている。そういう祈りです。

「主さま、あなたの御懷^{みぶところ}に寝ます」

と――私は時々、涙が溢れます――そうやつて眠ります。私が葉書に

「祈ります」

と書くと、必ずその瞬間に祈つています。決して、無駄な書き方をしてない。一つの葉書を書く時も、私は全身を込めている。書いているうちに示されたりする。信仰のない人に向かつても、それをやつています。



神さまが嫌いなのは、偽りの世界です。イザヤ書にも出ている。どんな状態でも神の前では、そのままそこに偽りがないということ。詩篇139篇の

「汝知り給う」

ということです。これが「全的な」ということ。

²⁵また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、
汝らの過失を免し給わん為なり』

免さなくてはいけない。人を赦さないで祈たつて、これはダメです。聖霊はそんなところに働くかない。自分で分かる。どんなに怨まれても、どんなに迫害されても、どんなに誤解されても、この立場に入ると大丈夫です。こちらが、本当の意味でキリストの勝利を頂いていますから。

私たちは、キリストにそのようにして赦された者です。キリストにそのように徹底的に、決定的に赦されているんだ。決定的に赦されている者は、そのキリストの赦し故に、人を赦すことができる。人間は感情的になかなか人が赦せません。けれども、そんな世界ではダメなんです。たくさん的人が、私の45年間の伝道で出入りしました。私は一人をもうらんでいません。もし、私がそういう感情を持つたならば、私には聖霊は働くかない。

「赦したることく赦し給え」

という、キリストの主の祈りは素晴らしい。

この四福音書を本当に受けとつたら、あなた方はえらいことになる。ただ聞くだけではダメです。

「聞きて行う者は…」

とキリストが言つておられる。

「汝の御意を成させ給え」

という。

「それでは（自分は）行わないのではないか」と、冗談じやない。

「汝の御意を、どうぞ、この身を通して成してください」

ということです。最大の行為は、神さまが、キリストがその人を通してなし給う。これが本当の行為だ。

「信仰と行為」

なんて分けるのではない。信行、一如です。それを信行という。信仰の「こう」の字は、もう我々は「仰ぐ」という字を書きません。私は少なくも、この「信仰」は、「信と行」と書いて、これを

「信行」

と読む。これからはそういうことにした。信即行である。その行いが、どんなに破れた行



いであつても、即している行いは本ものなんです。ところが、その行いが非常に立派に見えても、即していなきものはダメです、付け焼き刃なんです。

それが「全的」ということです。キリストの福音は、使徒たちの現実は、信行の現実はそういうものなんです。いわゆるプロテスタントの信仰をもう一つ乗り越えなければいかん。

「使徒的信仰」

と私が言うのはそのことなんです。使徒でも、預言者でも、みんな人間ですから、我々も人間ですから、躊躇したり転んだりズレがあつたりします。けれども、在り方の本当の姿がそこにある。カントが、

「善意志から発するところの行為がたとえ一人もできなくとも、それはあるべきものである」

と言つた。カントの道徳哲学の素晴らしいしさは、そういうところにあるんです。

●神の国の根源現実

「祈りて願うことは」とは、

「キリストの中に自分を入れて、祈り入りて願うことは」

ですよ。それは、「必ず得る」んです。根源現実で必ず得ていて。自分を全的に投入して祈つていることは、そこには「我」がないんですから。

「己を棄て」とは、何処に棄てるんですか。

「キリストの中に棄てる」

んですから。キリストの中に棄てると無者となる。そこに無限、無量なるものが働きだす。キリストが為してくださいんだから、必ず得るんです。与えられるんです。

「得たりと信ぜよ」とは、

「与えられたりと信ぜよ」

ということ。自分で得るのではない。「さらば得べし」とは、

「さらば与えられるべし」

ということです。みな、上からの受けとりなんだ。何しろ、山が動くような事を仰るんだから、正に驚くべきことです。

「そうですか、しかし、そう思つて祈つても、なかなか得ません
なんて、ただ現象面を見てるから、そんなことを言う。

「神の国の根源現実がそこに成つている」

ということです：（異言）…。これは、本当にそうなんです。だから力が来るんです。相対的な罪の世の中の奥に、天国がこの祈りの中で成つていて。新天新地は、そこにもう既に双葉の姿で来ている。本當です、これは。だから、キリストは、この福音書で示されてい



るよう、天国を現じつ歩いておられた。

「天国は近づきたり」

どころではない、

「天国は我が身边にあり」

ということです。福音書を読んで、

「それは素晴らしい天国の事態だ。ありがたくてしようがない。天国は希望でも何でもない、現実である」

ということ。

「聖国を来たらせ給え」

とは、

「聖国は既に来ている」

と。キリストは来たらせているんだ。だから、「来たらせ給え」は必ず成就する祈りなんです。世界がひっくり返つたって、第三次戦争がきたつて大丈夫だ。

「天地は過ぎゆかん、されど、我が言葉は過ぎゆかない」

と言われたのは、その現実です。「言葉が」ではない。言葉そのものの現実が過ぎゆかない。完全に、いわゆる死を乗り超えて、いる世界です。これを読んでいると、このキリストの言葉が内側からグースと光つてくる。

祈りて願うことの一番大事なのは、キリスト自身をいただくことです。現実には相対的には、病のことでもそこですぐに癒されないかも知れない。いいよ、どうだつて。けれども、キリスト自身をいただいてごらんなさい。キリストがそこから、

「癒えたり。安んぜよ」

と、もう祈つている人に働いている。

こないだ、ある人から、ちょっとお子さんが喘息的な病で、

「先生、祈つてくれ」

と電話が来た。私は電話の中で直ぐそこで祈つた。異言になつた、電話で。それから後、30分祈つていた。そのうちに、治つてしまつた。キリストの中に自分が入つて、キリストがなさるんだから、私がしたのではない。何と言いますか、この福音の素晴らしいさは。

●隅の首石

その次、12章にいきます。悪い農夫の話です。

¹イエス讐たとえをもつて彼らに語り出で給う『ある人、葡萄園を造り、籬を廻まがきめぐらし、酒槽さかぶねの穴を掘り、櫓ものみをたて、農夫たびたちどもに貸して、遠くに旅立せり。

「ある人」とは、もちろん、神さまです。²時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、僕をその許に遣ししに、



「³彼ら之を執^{とら}えて打ちたたき、空手^{むなで}にて帰らしめたり。⁴又ほかの僕を遣ししに、その首に傷つけ、かつ辱^{はずか}めたり。⁵また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。

「僕ども」とは預言者です。みな、片つ端からこれを殺してしまつた。最後に、⁶なお一人あり、即ちその愛しむ子なり

「その愛しむ子」とはイエス・キリスト自身のことです。

「わが子は敬うならん」と言ひて、最後に之を遣ししに、⁷かの農夫ども互いに言う「これは世嗣^{よつぎ}なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業^{しげよう}は、我らのものとなるべし」

「農夫ども」とは祭司や教法師やパリサイやサドカイや、いろんな連中です。そして、葡萄園の外に投げ棄てた。即ち、キリストはこの譬えでもつて、エルサレムの城外の十字架のことを既に預言しておられる。

「私はそのようにして死ぬよ」と。大変な譬話なんです、これは。

⁸すなわち執^{とら}えて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。⁹然らば葡萄園の主、なにを為^なさんか、來りて農夫どもを亡^きぼし、葡萄園を他の者どもに与^うべし。

「選民」なんていつたつてイスラエルはダメではないかと。「他の者」とは即ち「異邦人」のことです。その選民中の選ばれた器、パウロが一番キリストに反対していた。これがひっくり返されて、パウロは本当に参つた。それから後のパウロはキリストの僕となり、囚人となり、福音の証者となつた。パウロの回身回帰ほど鮮やかなものは他にはない。それをユダヤ人は相變わらず

「パウロは間違つた」

と言つてゐる。冗談じやない。かたくなもいゝところだ。頑固な民だ。

「¹⁰汝ら聖書に『造家者^{いえつくり}らの棄てたる石は、これぞ隅^{すみ}の首石^{おやいし}となれる』

と自分でちゃんと書いてゐる。とにかく、このキリスト、パウロが出たユダヤです。そのユダヤ人が、絶大な人と、最大な人とまだ本当に受けとらない。

この言葉は新約聖書に方々に引用されている。ペテロも引用しました。人に棄てられると、神さまに捨われる。「落ちこぼれ」なんていう言葉は大嫌いだ。落ちこぼれの少年は今度は、本当に福音に来たら、最も素晴らしいことになる。大体、あんな言葉を教育者が使うことが大間違いだ。

¹¹これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら読まぬか』

その代わり、土台石になるんです、その人が。あなた方も、あなた方の自分の環境の土



台石となるんだ。何と思われたつていいよ。真理に生きる者は、真理はそれ自らの力で必ず勝ちますから。負けているようだが、実は、本当は勝つっている。負けるが勝ち、という言葉があるが、本当にそうなんだ。敗北の勝利という。

●汝の神を愛すべし

今度は、マルコ伝12章28節のところにいきます。

²⁸学者の一人、かれらの論じおるを聞き、イエスの善く答え給えるを知り、進み出でて問う『すべての誠命のうち、何か第一なる』

「彼らの」とはパリサイ人のこと。^{びと}イエスにこんなことを聞くなんて冗談じゃない。

²⁹イエス答えたもう『第一は是なり^{これ}「イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主なり。

これは、有名な申命記の言葉です。

³⁰なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし』³¹第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」

「尽くし」というのは、皆これは「全て」という字です。ヘブライ語の「コル」という字です。^{となり}³¹第一は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誠命はなし』³²学者いう『善きかな師よ「神は唯一にして他に神なし」と言い給えるは真なり。^{まこと}³³「心を尽くし、智慧を尽くし、力を尽くして神を愛し、また己の^{さと}ごとく隣を愛する』は、もろもろの燔祭^{はんさい}および犠牲^{いけにえ}に勝るなり』³⁴イエスその聰く答へしを見て言い給う、「なんじ神の国に遠からず』此の後たれも敢えてイエスに問う者なかりき。

キリストは、本当は相手にならないんだけれども、

「よく答えたよ、よく分かったね」

なんて言っている。

「心を尽くし、智慧を尽くし、力を尽くして神を愛し……」

これは、イスラエルの小さな子供も皆暗記して知っている。申命記5章に出ている言葉です。一々原語のことは言いません。要するに、

「全存在をもつて、神を愛せよ」

ということです。私は、この言葉は困つてしまつた。愛せないんだ、どうしても。「神さまを愛せよ」なんて、どうしてもダメだ。そんなこと言つたつてダメですと。

「おのれの如く汝の隣を愛すべし」

「自己愛というのは誰でも本能的に持つている。そのように隣を愛せよ」

と。



なんて、そうではないんだ、これは、「自己」愛の強度は抜き難きものであるが、自己愛を方向転換して、隣人を愛せよ」ということです。

「己」を愛するは一番けしからんことだ」と、西郷南州も言っている。西郷南州も聖書を読んでいるのではないかと思う。

「己」を憎まずば我が弟子となることができない」とは、

「己」に否と言わなければ、私に然りと言うことはできない」ということです。信仰の世界はそうです。

●キリストの棄身の愛

プラスとマイナスとは、そこに放電する。プラスとプラスではダメなんだ。こちらがマイナスにならなくては。正直、マイナスなんです。それを、マイナスでないプラスだと思っているから、大間違いだ。

「あなたは全的なプラスです、私は全的なマイナスです」と。しかし、「全的なマイナス」と、これがまた言い切れない。

「それでもこういうところは少しいいところだつて有りますよ」なんて。ところが、全的にマイナスなんです、このエゴ、というやつが。我執というやつが「罪」の中核だから。

そいつを処分したのが、キリストの十字架ですから。十字架は、この我執、自己愛を十字架にかけてしまった。

「お前の自己愛は十字架にかける。この私の十字架の愛を受けとれ」と。この十字架のキリストの棄身の愛、本当の棄身の愛を、贖罪の棄身の愛を、これを受けると、神を愛することができるようになる。今度は、愛せざるを得なくなる。

「主さま!」「父よ!」

という、その叫びは、愛の叫びです。

心を尽くし、精神を尽くし、思を尽くし、力を尽くして、全存在をもつて、キリストが私たちを事実愛してくれださつた。十字架をもつて、また復活の命を与えようとして、聖霊をもつて与えようとするところの愛は三重の愛なんだ。

「贖罪、永遠の生命、無限無量の聖霊」

これが全キリストなんです。

「全キリストを、私を、そのままお前にやる」

という、愛を受けとると、その愛は神に向かつて、主に向かつて、隣人に向かつて、泉のごとく流れざるを得ない。だから、「愛すべし」でなくて、



「大丈夫、愛するぞ。そうなるぞ。そうでなければ、生きているというわけにはいかないよ」

と。人間という奴は、いろんなこの世の事でもつて、ゴタゴタゴタゴタやつていて。ところが、この愛が来ると、そのゴタゴタの、人間のいろんな愛の内容の質が変わつてくる。

その角度から、愛というものを見たのがゲーテなんです。普通の神学者は、

「アガペー、フィロス、エロース」

と分ける。ギリシア哲学はこのエロースです。エロースの中にも色々なものがあります。肉的ないわゆるエロースと、それから理想主義的な浪漫主義的な真理を追求するもの、これもみんなエロースなんです。プラトンの『パイドロス』にその事が書いてあります。あの『パイドロス』は、その意味においても大事な本です。

けれども、それはこちら側からの追求なんです。しかし、

「本当は、愛は全部、上から来ているんだ」

と。そこは、ゲーテというのはでつかい人物だ。

「恋愛だろうと、夫婦愛であろうと、友情であろうと、師弟の愛であろうと、全部もとは神さまから来ているんだ」

という。神さまから来ているから、全部それが健全な内容になつていくわけです。現実には、人間はなかなか健全ではありませんけれども、その角度から、愛というものを大きく見ている。

神学的な構造から、ティリッヒという人は、

「エロースとアガペーと両方の面がなければ、本当の愛ではない。アガペーが主的な角度である。アガペーがなかつたら盲目になるし、エロースがなかつたならば観念になる」

というようなことを彼は言つてます。しかし、一応分けてもいいけれども、我々が賜つている知情意が聖靈によつて動かされていくと、全部、天的な角度になる。いわゆる禁欲ではない。そういう角度から、キリストは結婚も全部祝福なさるわけです。

とにかく、全存在的に自分を与えていくこと、投げ出していくこと。キリストの中に投げだすのが祈りです。キリストの中に棄てることが祈りなんだ。「棄身」といつても、ちつとも難しくない。キリストの中に棄身すればいいんだから、この棄身は一番ありがたいんだ。棄身という言葉は非常に悲壯に感ずるけれども、キリストの中に棄身してくださいよ。これはえらいことになる…（異言）…。

あなた方、すごくうれしくてたまらないではないですか。どうですか。

「ああ、そうだったか。この福音というのは何も悲壯ではなかつた。十字架という門を通して、キリストの中に棄身して、あり難くて、楽で、力が来てしようがない」ということだ。どこに、福音に代えるものがあるんですか。もう、完全に律法の世界を乗



り越えてしまう。そういう意味で旧約聖書はアウフヘーベンして、棄てて成就されてしまつている。

「成就せんために来たれり」

というのは、次元の違つたものにおいて、成就するんです。そのまま成就するのではない。だから、キリストは、

「新興宗教はどうも律法を破つて困る」

なんて言われて誤解された。そうではない。根源的には全部、次元の違つた角度から、次元の違つた質をもつて、それを成就した。キリストの「山上の大告白」はモーセの十誡以上のことですから。

四福音書が身に付いたら、本当にエライことになる。この四夏を本当に楽しみにしてください。だから、私は、その先何をしていいか分からない。

「もう集会はやめだ、後は実践していけ」

なんて言うかも知れない。

（註⁴¹：1985～1988年の四夏の夏期福音特別集会はそれぞれマルコ、ルカ、マタイ、ヨハネの福音書を主題に開催された。夏期特集は1988年の第35回が最終回となつた）

●レプタ二一つ

寡婦のレプタの話、もちろん、これも『無者キリスト』に書いてあります。どうぞ、帰られてからご参考にお読みください。私の書いたものはラブレターだと思って、時々本当に読んでください。私は自分で読んでいて、ラインを引っ張つたりしている。神さまから与えられた真理だから、自分で復習している。けれども、こうやって語っていて、いつも新しいんです。

⁴¹ イエス賽錢函に對いて坐し、群衆の錢を賽錢函に投げ入るるを見給う。

富める多くの者は、多く投げ入れしが、

普通の宗教の事態を、キリストは、ただそつやつて語られた。ただし、問題はお賽錢そのものの問題ではない。お賽錢を投げて神さまに献げるその気持を見ている。

⁴² 一人の貧しき寡婦やもめきたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘りんほどなり。レプタというのは最低のお金です。イエスは弟子たちをわざわざ呼び寄せて、

⁴³ イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れたり。

弟子たちは、イエスが何を仰るかと思つたんだね。豊かな物の中から、

「まあこのくらい」

といつて適当にやつているのが普通なんだ、みんな。

⁴⁴ 凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、



凡ての所有、即ち己もちものが生命の料しろうをことごとく投げ入れたればなり』
一日の生活費を全部投げ入れた。

「明日のことは知らん、自分の生命を、全存在を投げ入れた」

ということです。これが本当の礼拝だという。

〔十一〕 献金

という言葉があるけれども、普通は十一献金もなかなかできない。ただ額のことを言つて
いるのではない。十一献金であろうと、何分の一であろうと、その何分の一をもつて、自
分を全部投げ入れるという気持を持たなければ。惜しんでいたら、これは祝福されない。

私は時々感激するようなことでつくわします。とにかく、

「何をするにしても全存在的であれ、全的であれ」

ということです。それも、力む必要はない。聖靈が来ると、全的ならざるを得ない。いゝ
加減なことをしたら、聖靈は働かない。勉強でも何でもそうです。

「時間がどれだけなければ

ではない。時間に対して、完全に時間を掌握してしまう。

「私は一切の秘訣を得たり」

とパウロが言つた。これが正にそうなんです。

そういうわけで、「第一の誠命」どころではない。これは、アルファにしてオメガなんで
す。神・キリストに愛され、神・キリストを愛さざるを得ない。誰をも愛し給うところの、
その人をその人らしく愛し給うところの、その愛。それをもつて、私たちが、隣人に対す
る愛をしていく。

愛というものは、すがたは、内容は色々です。或る時は、怒ることが愛なんだ。

「怒りは愛の別の形である」

とルターも言つてゐる。

「どうも依怙えこひいき頬こひらけのようだ」

なんて、そうではない。現れ方の質が違うんだ、人によつて。神さまはそういうようにし
ていらつしやる。不公平のようだが、実は不公平ではなかつたと、後から分かる。人間の
間ではなかなかそこまで本当にいきませんけれども、その質をもつて、

「お互いに愛せよ」

ということです。

● 神さまとの結び返し

マルコ伝13章は、終末のことを語つて、実に素晴らしいところです。今はこの13章の内
容的なものが迫つてゐる。20世紀は危ない。危機的な現実です。神に立ち帰らなければ、
神を無みしていれば、自分で審判を招く。



一番恐いものは原子爆弾ではない。人の心が一番恐い。人間の心というものは、一番、「天国と地獄」を受け入れるところのものなんだ。天国の心となるか、地獄の心となるか。

¹⁹その日は患難なやみの日なればなり。神の万物を造り給いし開闢かいびやくより今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。²⁰主その日を少なくし給わづば、救わるる者、一人だになからん。

「全世界は滅びてしまうぞ」

と、恐ろしい預言だ。権力者が、政治家が、軍人が悔改めないことには、何億も的人が犠牲になる。政治であろうと、経済であろうと、何であろうと、根底は宗教なんです。次元が違つた根底なんです。

「宗教現象は文化現象の一つだ」

なんて、冗談じやない。「宗教」という言葉はもともと「レリガーレ」というラテン語の動詞からくるので、「再結」という意味なんです。再び結ぶ。結び返しです。

「神さまとの結び返しをしろ」

というのが「宗教」という意味なんだ。このことをはつきり言つたのはアウグステイヌスです。

「結び返しをしないで、勝手なことをしていれば、滅びるぞ」

ということです。

「つるぎ剣を持つ者は剣で滅びるぞ」

とキリストも仰つた。聖書一巻は大変な真理の森です。

「聖靈の音信おとすれを汚す者は赦されない」

という。どんな仕事をしている人でも、魂がこの神・キリストと直結していかつたら、相対的な現実でそれがどんなに素晴らしい構造になつていても、倒れてしまう。

学校がそうです。学校問題を、何々委員会でいくら検討しても、一番大事な点は盲点になっている。ヒルティーが、

「人間は自己教育を自らしなければダメだ」と言つた。

「先生が自己教育をしないで教育ができるか」ということだ。親もそうです。

「教育」（エアツィーエン Erziehen）とは

「伸ばして然るべきところまで到達させる」

という字です。引っ張り上げる者が本ものでなかつたらダメなんです。何をしていても、文化文明の根底の神さまとの結び付きを各個人がやつてなかつたならばダメなんだ。

「宗教と政治は別だ」

なんて、そういうことを言つて、宗教をいい加減にしている。別ではない。もちろん、別



は別だ。しかし、次元が違うんだ。

けれども、その次元の違う宗教が——本当の意味の宗教ですよ、はつきり言つて福音です、お釈迦さんの教えでもいいけれども——福音が根底になかつたら、さつきの葉っぱばかりの無花果みたいに枯れてしまう。実が稔らない。

とにかく、人間の心の世界が一番恐ろしい。それは大体、サタンの手下に、サタンの配下になつてゐるから。だから、現代の文明に対しても、本当は

「サタンよ、退け！」

なんだ。そういう、本当に毅然たる勇者はキリストです。非常に纖細なものと、非常に大きいものと、福音は両方持つてゐる。大体、偉大な芸術はみんなそうです。ベートーヴェンでもゲーテでもレンブラントでも、最高級のものはそのあらゆるものと渾然と持つてゐる。

●ナルドの香油

それから最後に、受難の序曲になります。14章3節、

³イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給うとき、或女、価高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち来り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。

この「或る女」という言い方が面白い。ヨハネ伝にも出ています。ヨハネ伝では「ベタニヤのマリヤ」です。

「その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり」

この一言です。

と、全部注いでしまつた。

「こわして注いだ」

という。こういう事実に私は感激します。

「イエスの首に注ぎたり」

とは、イエスの全身にということです。ルカ伝の別のところでは「み足に」というのがある。「こうべに油を注ぐ」という事は、聖靈を授ける時のすがたです。「油注がれたる者」とはそれなんです。この場合は、もちろんそういう意味ではない。十字架にかかり給うキリストに、この「或る女」がみんなを代表したようなわけだ。

「私の先をよく知っているね」

とキリストが。葬りの時に油を塗りますから、先に油を塗つてしまつた。油を注いでしまつた。ナルドの香油というのは素晴らしいものらしい。ナルドというのは、もちろんインドの方から來ている。弟子が



「そんな無駄なことをするか」と言うわけだ。これも「或る人々」とあるが、弟子なんだ。

⁴ある人々、憤おりて互に言う『なに故かく溢りに油を費すか、⁵この油を三百デナリ余に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』⁶而していたく女を咎む。

もつともらしい事を言つている。こんなのは偽善者の言葉だ。

⁶イエス言い給う『その為に任せよ、何ぞこの女を悩ますか、我に善き事をなせり。⁷貧しき者は、常に汝らと偕におれば、何時^{いつ}にても心のままに助け得べし、然れど我は常に汝らと偕におらず。⁸この女は、なし得る限りをなして、我が体に香油をそそぎ、預^{あらか}じめ葬りの備えをなせり。

ここに「体」と書いてあるでしょ。

「我が体に香油をそそぎ預^{あらか}じめ葬りの備えをなせり」

と、はつきり仰つた。

天涯孤独のキリストが本当に慰めを得た。キリストの涙はおなかの中に流れたでしょう。この「或る女」は全愛を注いだ。全身全愛をもつて助けてくださったキリストに、全身全愛をもつて応えたわけです。これ以上の事は、世の中にはない。

「愛は一切に勝つ」

(アモール オムニア ヴィンキット AMOR OMNIA VINCIT.)

という、ヒルティーの大好きな言葉です。ヒルティーの墓碑銘にある。愛は最大の力を持つている。しかも、もちろん具体的な愛です。愛より強いものはない。だから、キリストの十字架の愛は最大の力を持っている。パウロが、

「十字架は神の力だ。十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の力なり」

と言つた。だから、サタンが、悪霊がいろいろ働くたら、

「十字架!」「キリスト!」

とひと言、言えば、サタンは退く。ルターが

「小さな言葉がサタンを倒す」

と、あの有名な讃美歌に歌つている。「小さな言葉」とは、「十字架」とか「キリスト」とかいう言葉です。靈的な奴らは、サタンという奴は分かるんだな。引っ込むです。キリストの靈は最高の靈ですから。何も恐いことはない。サタンと自分が戦おうなんて思つたら、必ずやられる。

「エホバはわが避所なり。悩める時のいと近き助けなり」

と、ルターの讃美歌は詩篇49篇から来ている。

キリストは避所です。避所に入つてしまふと、力が来るんだから、臆病になるのではない。



キリストの中に入ると、これは絶対安全地帯なんだ。恐いものはない。そうすると、聖霊が我々をして、

「サタンよ退け！」

と、権威をもつて言わせる。本当ですよ。私は自分で体験して知つてますから。の方でも、一つも恐くない。キリストを捕らえようとしたら、兵隊がたじろいだ。復活のキリストが現れたら、みんな逃げて行つたではないですか。

聖書の現実は大変な現実だ。文字の背後から、叫び、呻いている。それは、震動した文字ですから。「意味がどうだ」なんて、そんな文字ではない。

「壺を打ち割りて」

自分を本当に投げ棄てて、

「もうこの壺は使いません」

と。全的です。この心の気合です、本当に獻げている。もう

「ハレルヤ！ アーメン！」

だ。だから、

「⁹誠に汝らに告ぐ、全世界、何處^{いすこ}にても、福音の宣^ペ伝えらるる処には、この全世界に宣べ伝えられる」

女の為し事も記念として語らるべし』

と、キリストが言われたのは、このような事実の奥に動いているところの、この女性の魂の姿を、キリストは言われた。誰も慰めてくれない。唯一人、このことがキリストの本当の慰めとなつた。

「為し得る限りを為した。私の愛に本当に愛をもつて応えた」と。生命、愛は「悟り」の世界ではない。生命の一番の中身は愛ですから。愛のない生命は生命ではない。

「生きてます」

なんて言つても、愛のない人は百年生きたつてダメなんだ。

●お返しの愛の生活

私の兄貴の終わりの数年間は、私に深い印象を与えていた。それが私にはいつまで経つても、いや、時が経つにつれて、いよいよ響いて来る。この兄貴は私のために生命を棄てたと思つてゐる。それで、福音せざるを得ない。兄貴に代わつてやらざるを得ない。27歳くらいで仆^{たお}れる兄貴ではなかつたんだ。いろんな犠牲において私は生きているんだ、母の失明もあるし。

皆さんも、いろいろな事をご自分の身邊で体験なさつていらっしゃると思いますが、全部これは、キリストへもつて行く路ですから。我々はキリストにいろんな事を通して連れ



て行かれる。それで、キリストの中に入つたら、それらのマイナスも全部、プラスにしてお返しができる。お返しというのは、キリストにではない。お返しの愛の生活が、生命がいくということです。

特に女性の方は、愛が生命でしょ。相対的な意味でいいましてね。愛については、男性も女性もないですけれども。世界の平和のためには、女性が本当に手をつないで、

「あなた方、男の人達は何しますか、そんなもの棄てなさい」

と、やらなくてはいかんわけだ。ジャンヌダルクのように戦う必要はないけれども。

孔子も「仁」を説きました。孟子は「恕」、思いやりということです。「仁」も情けということです。お釈迦さんが「慈悲」だ。みんな、これはあわれみです。キリストは「愛」です。要するに、みんな同じような世界です。そして、その一番凄いのを現したのが、何といつても、キリストです。

万物は本当は愛を求めている。動物から人間に到るまで。愛に本当は飢えている。その我々の渴きを、我々の飢えを満たしてくださるところの愛は、このキリストの愛です。これで、本当に満ち溢れる。他の愛は或る程度ですけれども、こればかりは満ち溢れる。

というのは、これは永遠の生命の質を持つていて愛だから。それが、十字架と現れ、復活と現れ、聖霊の降臨と現れる。大変なんだ。これがキリストの行為なんです。存在的行為です。無限に与えて止まない。だから、無限無量だと言う。もう、説明できない。何をか言わんやと。絶言絶慮、以心伝心です。

今回は、十字架のところまで行きませんけれども、十字架にかかる前に、この或る女が表した、この在り方。これは我々にとつて、我々のキリストに対する在り方が、壺を打ち割つて、自分をぶち破つて、我なき我となつて、そして進むこと。それは聖霊の力がさせる。

永いこと、私は「聖霊」なんて聞いてたけれども、

「何だろうなあ、聖霊というのは？」

と思つていた。20歳から、1950年まで。46歳なつてやつと目が開いた。

「見えんことなり」

とはそれだった。見えた。こんな素晴らしい福音は、他のものと代えられない。本当に突き抜けた人間になる。だから、仏教の一流のものを読んでも、世界中のどんな素晴らしいものを読んでも、みんなその角度から受けとれる。全部、包んでしまう。

そういう福音をいただき、み霊をいただいたから、私は詩を書かざるを得ない。これを表現せざるを得ない。もう、やり切れないです、正直。

● 箕の露

一茶というのは面白い奴だ。加賀の殿様が参勤交代で江戸の方へ向かつて、柏原という所に来たら、一茶のいることを知つたものだから、人を遣わして、自分のいる本陣へ招こ



うとした。そうしたら、一茶は、

「我らにはお訪ねすべき用もござらん。御用あらば先様からおいでなされ」と、百万石^{ごく}の大名に向かつて、

「こちらは別に用がない。用があるなら来てください」

と言つた。一茶という奴は面白いやつだ。百万石の威光をもつてしても、これはどうにもならん。仕方がないから、加賀公もちょっとものの分かつた方ですから、それは一応そつだと。それではひとつ、句をお願いしようど、人を遣わしたら、

「ではその儀ならば、お書きしましょう」

と。使いが来たら、一茶は、墨の水がないから、硯^{すずり}の中に唾して、墨をすつて書こうとしたら、使いの者が

「それはちょっと余りに失礼ではないですか」

と言つたら、一茶は

「そうか、それではよそう」

なんて（笑）。使いの者は、それではちゃんと復命できなかつたら、

「それは誠にこちらが申し訳なかつた。それではどうぞお願ひします。悪うございました」

とあやまつた。そこで、一茶は硯をすつて書いた。何と書いたかといふと

「何のその百万石も筐の露」

と書いた。百万石も筐の露と同じことだ。そんなものは相手にしないと。一茶なんていう魂は、本当に突き抜けて、俳諧の世界で人生を詠つてゐる。そして、本当のものを彼は示している。

だから、我々は

「百万石も何のその、筐の露だ」

といつて、この世の事に執着しないでいく。私達がもし執着するなら、

「キリストにだけだ、福音にだけだ」

と。この福音は、百万石どころの騒ぎではない。こういうわけで、福音は、聖書一巻といふものは大変なもので、聖書一巻は、何といつても、聖靈の書ですから。万巻の書もこの一巻にかなわない。

「あらゆる本のうちの唯一つの本」

と、ゲーテが言つてゐる。この聖書一巻は本当に身に付けなければダメです。

「こう書いてあります」

ではなくて、身に付けなくては。



● その愛と憐憫とにより

最後に、イザヤ書の句を引用します。イザヤ書というのは大変なところだ。イザヤ書のことと詠つた、あの五つの召団讃歌は、私の作つた讃美歌の白眉です。

（註：召団讃歌A30「いとも聖なる」、A31「曠野の如し」、A32「イスラエル・ユダの」、A33「主なるキリストは」、A34「み霊の主イエスに」）

あれは時々自分で歌つてみてください、みんな長いけれども。

「エホバ言い給えり、誠にかれらはわが民なり、虚偽いつわりをせざる子らなりと。

「虚偽をせざる」という素晴らしい言葉がある。

かくてエホバはかれらのために救主となりたまえり」（イザヤ63・8）

ちゃんと書いてある。キリストを預言している。

「かれらの難難なやみのときはエホバもなやみ給いてその面前みまえの使つかいをもて彼等かれらをすくい、その愛と憐憫あわれみとによりて彼等かれらをあがない、彼等かれらをもたげ、昔時いにしえの日つねに彼等かれらをいだきたまえり」（イザヤ63・9）

たたみかけて、この愛を書いている。これは過去ばかりでなくて、現在であり、また未来もある。キリストの愛は正に、この言葉の中において表現されている。

「共に悩みて

共に悩ながら、その難難なやみを全部のけてしまう。

その愛と憐憫あわれみとによりて彼等かれらをあがない、彼等かれらをもたげ

復活の力で、聖靈せいりで

昔時いにしえの日

今日、また未来も

つねに彼等かれらを

汝らを

いだきたもうなり」

と。この聖句は全部、現在、未来に向かつて、そのようにして読んでいかなければダメです。いろいろな事があるが、コリント前書13章で

「最大のものは愛だ」

とパウロも絶叫した。

「おおよそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み…」

と、担い貫くんぬです、あれはみんな。「貫く」という言葉はないけれども。『福音の心臓』（『曠愛新書』第1号）という私の小冊子にも書きましたが。

さあ、本当に皆と一緒にどんどん勇ましく行きましょう。あなた方はみんな使命がありますから、のつべきならない使命が。そして、これが大交響曲となつて、大讃美となつて進んで往く。

